

**J** **apanese text**

2010年 春/夏号 日本語編

映画

**黒澤明 生誕 100 年記念**  
**KUROSAWA を語る**

文=清水千佳子

p.113

『羅生門』(1950)や『七人の侍』(1954)など数々の名作を世に送り出し、1998年に逝去した日本映画界の巨匠、黒澤明。今なお世界に影響を与え続けている名監督を語り尽くすことは到底叶わないが、生誕 100 年の今年、ゆかりある人々の言葉を通して、その魅力の一端を紹介してみたい。

**おやじのこと**

——黒澤久雄(黒澤プロダクション代表取締役)

撮影=藤本賢一

p.114

妥協を許さない厳しい映画作りで知られる一方、役者やスタッフに慕われ、自宅で酒を酌み交わすことも多かったという黒澤明。家族の目にはどう映っていたのか、長男の黒澤久雄氏に聞いた。「普通の父親でしたよ。基本的に優しい人で、厳格でもなかった。仕事がないときは、釣りや映画に連れて行ってもらいました。おいしいもの、特に肉にはうるさくて、いつも決まった店から牛ヒレのいいのなんかを家に届けてもらっていましたね。とって、毎日豪華な食事だったわけではありませんが、うちの料理は何でもおいしかったです。母はおやじと結婚して、料理が上手くなったんじゃないかな。おやじが作ることもたまにありましたよ。スパイスをいっぱい使ってカレー粉を作ったり。でも、作りっぱなしで片付けないから、あの人を作ると周りが迷惑するんです。黒澤家の食事は、家族みんなで食卓を囲んでおいしく食べるのが基本。それは黒澤組の撮影現場も同じで、役者もスタッフも一緒に同じものを食べていました。子どもの頃、母がよくロケ先にステーキ肉を送っていたのを覚えています。1人に2枚で、当時100人程の人間が関わっていましたから、合計約200枚のステーキ肉。制作費がかさむわけですよね」

苦笑しながら語る久雄氏だが、父親と自分は似ていると分析する。「2人とも凝り性で、もの作りが大好きで、よく眠る。父は何かの食べ物に凝ると、しばらくそればかり食べていました。おかげで、母は何日も朝食に卵焼きを作り続けたり……。また、おやじは一つの作品が完成して時間ができると、何日間も寝てばかりいましたが、僕も放っておかれたら10時間でも、12時間でも寝ています」

久雄氏は1985年頃から父親の映画制作に参加。仕事場での2人はどんな関係だったのだろう。「僕は撮影現場へは行かないで、ラフに編集された段階で初めて観るんです。そして、客の目線で『ここは長過ぎるから切ったほうがいい』などと意見する。ケンカになることもありましたが、『そうか、何かうまくいかないかと思ってたんだ』と納得してもらえことのほうが多かったですね。あと、新作発表の記者会見で、僕が言ったことをそのまましゃべることがあって、そんなときは『あ、上手いこと使ったな』とほくそ笑んでいました。いつも僕の言葉に耳を傾けてくれる人でしたね」

最後に、今もし黒澤監督と会えるなら、どんな風に過ごしたいかを尋ねてみた。「一緒に映画を観たいですね。そして、『つまんねえな』とか言い合いたいです」

**黒澤久雄(くろさわ・ひさお)**

1945年に黒澤明の長男として誕生。タレント活動を経て、『乱』(1985)以降、黒澤明映画の制作に携わる。現在は黒澤明映画の著作権管理や文化事業を行うほか、さまざまなジャンルでプロデュース業を展開。

**■ 永田町 黒澤**

東京都千代田区永田町 2-7-9 Tel. 03-3580-9638

11:30 ~ 15:00, 17:00 ~ 23:00

土曜・祝日 12:00 ~ 22:00 日曜定休

<http://9638.net/eng/>

黒澤組の美術スタッフが内外観を手がけた店では、黒澤が好んだ肉料理や蕎麦が味わえる。

## AK100 プロジェクト

黒澤明生誕 100 年を記念し、その名作の数々や、もの作りに対する高い精神性を未来へ継承することを目的に、2009 年から 2011 年にかけて世界ツアーが開催されている。内容は映画の上映、衣装や小道具、監督の遺品の展示など。

### ■ AK100 ワールドツアー スケジュール

3/23	アメリカ ロサンゼルス
6/17～26	ロシア モスクワ (第 32 回モスクワ国際映画祭)
7/1～2	日本 広島県廿日市市
9月または10月	フランス モン・サン・ミッシェル (予定)
10/1～31	日本 山梨県北杜市
10/7～15	韓国 釜山 (第 15 回釜山国際映画祭・予定)
10/28～11/5	イタリア ローマ (第 5 回ローマ国際映画祭・予定)

※上記日程は 2010 年 2 月現在の予定で変更になる場合があります。詳細は公式サイトでご確認ください。http://ak100project.com/

写真提供 = AK 100 プロジェクト実行委員会

## 普遍の魅力

——原田真人 (映画監督)

撮影 = 山岸 伸

p.115

黒澤明映画を愛する数多の映画監督の中でも、原田真人さんは希有な存在だ。晩年の監督に自らインタビューして『黒澤明語る』という本を著し、現在は大学の授業で黒澤映画の魅力を説く。5 歳の時に母親に連れられて『七人の侍』の撮影現場を見学したのは、本人の言葉どおり「運命の出会い」だろう。日本映画オールタイム・トップテンの 1、2 位に『七人の侍』と『羅生門』を挙げる原田氏は現在、東京とロサンゼルスを行き来しながら、映画の制作をする生

活。欧米の映画関係者との付き合いも多い彼は、黒澤映画が海外で評価されている一番の理由を「アンビバレンス」と断言する。「ダイナミックな映像や技術を挙げる人もいますが、一番は違う。アンビバレンス、すなわち葛藤、引き裂かれる思いがくっきり描かれていることです。たとえば、『七人の侍』の菊千代は侍のふりをしているけれど実際は農民で、両方の苦悩がわかる。登場人物の心の葛藤、相容れない者同士の対決。その根底には監督が若い頃から傾倒していたロシア文学がありますが、そもそも、シェイクスピアや近松門左衛門の時代からドラマ作りの根幹はアンビバレンス。普遍的なテーマだから、作品が古くならないんです」原田氏の熱のこもった言葉は続く。「黒澤映画について、もう一つ傑出しているところを挙げると——これは Coppola が特に敬愛している部分ですが——登場人物に対する誠実さです。1 人の映画監督がスクリーンのなかで生み出せる人間には限りがありますが、黒澤さんは自作に登場する膨大な数の人物をゼロから創っている。『七人の侍』には大勢の農民たちが登場しますが、その全員に戸籍まで与えているのです。こうした一つ一つの役に対する誠実な姿勢は、僕自身の映画作りにも影響しています」

### 原田真人 (はらだ・まさと)

1949 年生まれ。『KAMIKAZE TAXI』(1995) で国際的な評価を得る。近作に 1985 年の日航機墜落事故を題材にした『クライマーズ・ハイ』(2008)。目下、井上靖の『わが母の記』の映画化など複数のプロジェクトを進行中。

アート

## アーティスト・インタビュー

文＝清水千佳子

### 森村泰昌 なにものかへのレクイエム ——戦場の頂上の芸術

撮影＝坂本正行 文＝白坂ゆり

p.116

1985年から、《モナ＝リザ》などの名画の登場人物やマリリン・モンローら映画女優などに扮したセルフポートレイトをつくりだしてきた、アーティストの森村<sup>やすまさ</sup>泰昌。老朽化した建物が解体され、高層ビルに塗り替わっていくような現代を見据えながら、「20世紀の記憶を壊しながら突っ走っていく21世紀に不安を抱いている」と語る。

「ルネサンスをはじめ、多くの素晴らしい芸術は、過去のものをも今の時代に移し替え、生き生きと甦らせようとする工夫や模索のなかから生まれました。私も、過去を否定するのではなく、ただ昔を懐かしむのでもなく、過去をどう受け継いで未来に受け渡していくか、歴史を再解釈したいと思ったのです」

そんな思いで次のテーマに選んだのは「20世紀の男たち」。三島由紀夫、毛沢東ら、歴史に影響を与えた人物に“なり”、20世紀とは何だったのかを問う。2006年から取り組んできた、この『なにものかへのレクイエム』シリーズを発表する個展「なにものかへのレクイエム——戦場の頂上の芸術」が開かれる。

「20世紀、女性が最も輝いていたのは、映画の『フィクション』のなか。一方、男性は、政治や戦争、革命という『現実』の世界で輝いていた。そこで、報道写真のなかにいる男を体現していきました。20世紀は、この虚実の組み合わせによって構成されていたと考えています」

そこに広がるのは、独自の解釈を加えた、いわば森村版20世紀史。ヒトラーを風刺したチャップリンの映画『独裁者』の演説シーンをアレンジ。ピカソや手塚治虫など、森村が

選んだ「20世紀の美術家10人」の肖像にも挑んだ。

「最後にたどり着いたのは、『1945年』という地点でした。19世紀をひきずる20世紀から、21世紀を予告する20世紀の変わり目ともいえますね」。

終戦パレードで女性にキスする、アメリカの海兵隊員。1945年の『ライフ』を飾った写真を、現在のタイムズスクエアで撮影した。プレートには、真珠湾攻撃、広島と長崎への原爆投下、アメリカ同時多発テロ事件の日付が刻まれている。

また、硫黄島にアメリカ海兵隊が上陸し、スリバチ山に星条旗を立てた有名な報道写真から発想し、映像作品を制作した。物語のなかで、森村扮する一兵卒は、絵の道具や楽器など芸術の道具を、アメリカ海兵隊に手渡す。彼らが山頂に立っているのは白旗だ。一兵卒とは、無名の人を象徴する。「生活するの生きるの闘いだとして、すべてを見下ろせる頂上に立ったときに、私ならどんな旗を立てたいか？ 芸術の旗を立てたいと思いました。私が考える芸術の旗とは、まだ何の色もついていない白いキャンバスのような旗。政治も経済も、基本的には勝者優先の世界ですが、芸術は、社会からこぼれた存在を輝かせる世界です。20世紀の歴史を追ううちに、歴史に名づけられない存在に行き着きました」  
 あなたならどんな旗を掲げますか？

3月11日～5月9日

■ 東京都写真美術館

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

www.syabi.com

6月26日～9月5日

■ 豊田市美術館

www.museum.toyota.aichi.jp

広島市現代美術館、兵庫県立美術館へ巡回。